仮往生伝試文

古井由吉

河出書房新社

仮往生伝試文

一九八九年 九 月三十日 ―― 初版発行
一九九〇年 二 月十三日 ―― 四版発行

古井由吉 ―― 著者
菊地信義 ―― 装幀者
清水勝 ―― 発行者
株式会社河出書房新社 ―― 発行所
東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
電話(〇三)四〇四一-二〇一(営業)(〇三)四〇四-八六一一(編集)
振替口座(東京)〇一六〇-三-一〇八〇一
大日本印刷株式会社 ―― 印刷
小泉製本株式会社 ―― 製本
© 1989 Printed in Japan
定価は函・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はおとりかえします
ISBN4-309-00586-1

目次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

厠の静まり……7
水漿の境……33
命は惜しく妻も去り難し……63
いかゞせむと鳥部野に……95
いま暫くは人間に……127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

諸行有穢の響きあり……169
すゞろに笑壺に……203
物に立たれて……231
去年聞きし楽の音……261
声まぎらはしほとゝぎす……289
四方に雨を見るやうに……317
愁ひなきにひとしく……349
また明後日ばかりまゐるべきよし……379

仮往生伝試文

厠の静まり

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

――されば、まことに最後に思ひ出でむこと、かならず遂ぐべきなり。

今日は入滅という日に、寝床の中から弟子に命じて、碁枰（ごばん）を取り出させ、助け起き直らせてそれに向かうと、碁を一枰打たん、と細い声で甥にあたる聖人を呼んで、呆れる弟子たちの見まもる中、念仏も唱えずに石を並べはじめる。たがいに十目ばかり置いたところで、よしよし打たじ、と石を押しやぶり、また横になる。

多武峯の増賀上人の往生の話である。甥の聖人がおそるおそる今の振舞いの訳を聞くと、むかし小法師であった頃、人の碁を打つのを見たが、ただいま念仏を唱えながら、心に思い出されて、碁を打たばやと思ふによりて、碁を打ったのだと答えた。

心得はないままに石をただ並べてみた。人が碁に興ずるところを、むかし、通りがかりにうち眺めたことがあるのだろう。それもおそらく、生涯でたった一度の関心だった。

しばらくしてまた、かきおこせ、と弟子を呼んで、今度は泥障（あおり）というものを持って来させる。馬具の類で鞍の左右に垂らして泥の跳ねかかるのをふせぐ革の物らしい。それを自分の頸に懸けさせる。鞍にあたるところに頭が出るかたちになる。そしていかにも苦しげなのをこらえて、左右の肱をさしのべる

と、古泥障を纏きて舞ふ、と多少の節はつけて歌ったのだろう、二、三度ばかり舞ってから、これ取り去けよ、と泥障をはずさせる。

甥の聖人は先よりもよほど仰天したにちがいない。また、おそるおそるたずねると、答えて言うには、若い頃に、隣の房に小法師どもが多く集まって、なにやら笑いののしるので、のぞいてみたら、その中の一人が泥障を頸に懸けて、胡蝶胡蝶とぞ人はいへども、古泥障を纏きてぞ舞ふ、と歌って舞っていた。それを、

――好ましと思ひしが、年頃は忘れたりつるに、ただいま思ひ出でられたれば、それ遂げむと思ひてかなでつるなり。今は思ふことつゆなし。

胡蝶の舞いとは、宮中などで童が四人、蝶の装束をして背に翅を負い、山吹の花をかざして舞うのだそうで、いとあはれに、なまめきてみゆ、などと源氏物語にもきこえ、それに見立てて、にくさげな小法師が、ごわごわの馬の泥よけを背から着こんで、両肱を張って翅のこころで左右の端をはねあげ、おそらく屁っぴり腰でことさらむさくるしく舞う。身をもてあました若い者のやりそうな悪戯で、そのどぎついおかしさは目にうかぶようだが、これを物陰から、十歳で叡山に登り天台座主の弟子となった秀才が見ていた。好ましと思った。八十歳を越した往生の日に、ふと思い出して、遂げんと思った。

俗世の名聞には狂気をよそおって拒んだという。ことにふれて狂ふことのみありけれど、それにつけて貴きおぼえはいよいよ増りけり、とある。狂えば貴ぶ、貴べば狂う。聖と俗世との関係だ。老いてからは物狂いの度も進んだ様子で、三条の太皇太后の出家に導師として招かれて、髪を挟んでおろした、その一同悲歎の絶頂で、ところで、ほかならぬこの増賀を召されたのは、心得ぬことだ、もしや一物が人よりも大きいことを聞こしめしたか、と口走ったり、そのあと、腹をくだしているのでと言ってさっさと御前をさがるや、簀子の縁に出て、御簾の内から見えるあたりで、やおら尻を掻きあげ派手な排泄

に及んだり、たしかに、この太皇太后なるお人は、信心が形式に過ぎてヲコのところがあったようで、それに対する諷刺の念もはたらいていたのだろうけれど、いかにも傍若無人な、どちらも下にかかった物狂いには、生涯徹底しておこない澄ました中で、歳月に侵蝕されずに保存された、童の奔放さも感じられる。しかし最後の日のあの振舞いには、物狂いはなかったと思われる。

生涯の際に何となく思い出された古いささやかな欲求は、往生の障りともなるので、あっさりと果たせるものなら果たしておいたほうがよろしい、と平たく実践上の教訓と取ればそうなるが、真意はそんなことでもないのだろう。もっと端的に、そんなふうに思い出した、そんなふうにちょっとやってみる気になった、とそれだけで十分の、往生のしるしだ、という意ではないか。

今までに心の安静のさまたげとなりかねなかったのは、一場の囲碁と泥障胡蝶の舞いと、この両度にわたってつかのま淡く動いた関心だけであり、それほどの聖人であった、とまさか言うつもりでもなかろう。かつてすこしでも心をおのずと惹いたことならば、何事でもいいようなもの、ほんのちょっとした、無数度のたたずみの、ひとつにちがいない。賭博や放蕩やの方角へのひそかな関心を、とくにあげつらうこともない。いずれ些事のひとつだ。些事だから心を惹く。かりそめに好ましと思ったその事柄を、六十年七十年と隔てて、好ましと思ったその心の動きもふくめ、また好ましと思う、そしてそれをふたたび、いや初めて、すでに苦しい息のもとで、身をもってかつがつなぞってみる。これもかりそめとしても、今一度の、仕舞いのかりそめ、人生そのものに等しい。情景と気安く呼ばれているものは、ほんとうのところ、こういうものなのだろう。しかし、

――好ましと思ひしが、年頃は忘れたりつるに……

この年来の忘失の、おそらく、清浄さが大事なのだろう。でなければ、ただいま思ひ出でつれば、と言ったところで、何の節目にもならない。なにも難儀なことではなくて、いつのまにかすっかり忘れて

ました、と本心からそう言えれば、それですでに清浄のはずなのだが、それがあんがい、聖人の聖人たる所以なのだろうか。

われらはたいてい、忘失すら不浄の者である。なま忘れに、そら忘れ。抑圧に隠蔽、捏造に転化。思い出しました、とそれなりにさわやかに眉をほどくことが、どれだけある。殊勝なところでせいぜいが、おそれいりましたと悪びれるぐらいなもの、それも一部自供であったり、虚言なかばであったり、下心があったり。あげくには、隠しているのか忘れているのか、そもそもそんなことは初めからなかったのか、大ありだったのか、自分で感じ分けもつかなくなり、記憶の底をのぞけば真っ白で、人の心はこうも白くなるものか、とつくづく呆れるが、それはもとより、忘失の清浄さとは異なる。

あるいは、事をそう陰気にばかり取らず、ささやかながら楽しい事柄の、ながらく忘れていたのが、ふいに思い出されたとする。そういう時についほころぶ人間の顔は、よほど卑しい楽しみでないかぎり、ほかの時よりはずいぶんと品がよろしいようだ。そんな記憶でもしかし、なにか厭なもの、汚いようなものを、一緒に引いて来はしないか。あるいは、その記憶自体がくたびれて哀しげなことはないか。

囲碁の情景と言い、泥障胡蝶の情景と言い、どちらも歳月を渡る間に、その好ましさをすこしも損われなかった。苦心惨憺、克服された跡も見えない。そんなものがあれば、年頃は忘れたりつるにという言葉は、天真ではなくなる。それを遂げんとする心にも、生涯ついに免れたという安堵のうちに、恐れがまつわりつくところだ。臨終を前にして、由なき物狂いとなる。忘失を渡るうちに、おのずと浄化された、ということでもないのだろう。浄化されたものなら、わざわざ起きあがってなぞらえたところで、元と異なるのだから、遂げたことにはならない。むかし、ふと立ち止まって目を惹かれた時が、今のこの往生の時に、そっくりそのまま甦ったのでなくてはならない。長い忘失を相隔てて、あいだにいかなる経緯、いかなる苦闘があったかは知らず、どちらもひとしく無垢なのだ。

今はつゆ思ふことなし――生涯の心のこしを、最後に果たした。人のやっていたのを眺めて、自分もやってみたいと思ったが、やらずじまいで来たことを、最後に形ばかりなぞって往く。やりおおせた、遂げたことになるのだろうか。いや、これはすでに反復である。自分もやってみたいと、うち眺めたことが、やったにひとしい、そんな瞬間はある。それが臨終の際に、思い出され、繰り返される。充足がひとつに重なり、忘失の輪が円結する。すでに遂げた、つねに遂げた、いままた遂げた。生涯、聖人はかりそめに、碁を打っていた、泥障をかぶって胡蝶を舞っていた、おもしろくもおかしくもないが、好ましと思った。反復ながら悪夢の色はすこしもない。そのやすらかさを確めるために、あるいはすでにそうした生涯への感謝の念からか、苦しい身を床の上にかき起させ、碁石を十目ばかり並べて押しやぶり、重い泥障を頸に懸けさせ、息をこらえて、ひょこひょこと、すこしばかり小手に舞う。寝床にまた横になり、相変らずおもしろくもおかしくもないが、とつぶやいて満足する。

忘失の清浄さの中から、生涯の反復が淡くうかんで棄てられる。往生とは、これに近いものか。

さればまた、まことに最後に思ひ出でむこと――。

最後とは往生の際になるわけだが、しかし、そうと限ったものでもない。日常坐臥の内にもおのずと、そのつど最後はある。その時までの最後だと考えられる境はある。常住即何やらと、そんな尊げな見当ではなくて、生きる心がいきなり、先をつかのま堰かれて、何事かがいまにも思い出されかかる。遂げばや、と歎息する。遂げるというほどの、おもおもしい事柄が念頭にあるわけでない。情念がどこかへ粘るでもない。ただ、いつかたまたま心にのこして過ぎた、ささやかな時が振り返られる。しかし何時だか、何事だか、定まらない。自身の行為だか、人の姿だか、それも分からない。過去に実際にあった事なのか、それとも、今ここで何事かを振り返る自身を、すでに一身を超えた情景として、自身がまた

どこかから振り返り、眺めているのか、泣き濡れて……。

睡眠中の夢のことだが、綺麗な夢を柄にもなく続けて見るようになったら、心身の弱っているしるしなので、しばらくは気をつけたほうがよいと言われる。遠くに清い水があり、そのむこうにお花畑があり、そこで人が楽しそうに呼んでいる、という夢は重い病人たちがよく見るらしい。本人は夢の中で懸命に足を踏んばっている、と体験者から聞いた。尻ごみしながら、行ってもいいか、行ってもいいだろう、と家族や知人たちに懇願している。とんでもないとまわりは縋って留めてくれるものと思ったら、はかばかしい返事もせず、なんだか日常的なことをささやきあっていた。それが恐ろしくて目を覚ましたそうだ。

この夢などは、自身の姿がどう見えているのだろう。夢を見る自身と、夢の中の自身とがほぼ一体で、呼ぶ声に惹かれたり竦んだりしているのなら、まだしも大丈夫のように思われる。しかし夢の中の姿が、夢を見る者から離れて、すこしも乱れず、花に目をやらず呼ぶ声も耳に入らぬ様子で、まるで別の何かを眺めているとしたら、これはだいぶあやうい。このあやうさには、花畑もいらない。夢である必要すらない。現であるほうが、怖さはまさる。ある日、道でつくづくと物を眺めている自分を見たとか。分身の変異ではない。身はやはりひとつなのだ。無数度の反復の、原図のような境に踏みこんだ心地か。

しかし反復に嫌厭や恐怖を覚えるうちはまだ元気、生活欲も見かけよりは旺盛なのだ。それにやすらぎ、と言わないまでも、ほのかにも懐かしさを呼びおこされるようになると、吉凶はともかく、妙な分岐点にさしかかった——いや、さしかかるのはのべつのことで、たいていはちらりと睨んで通り過ぎてきたのが、いつのまにか歩みが止まり、はてしもなく眺めている。あまりにも濃い反復感というものは、その中に踏みこんでついたたずんだ者にとって、日常の内から、思いがけない時空へつながる、抜け穴の入口みたいなものだ。周囲の目に消えるのは、それから何カ月、あるいは何年か後かもしれないが。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com